

個の物語から社会を考える

東京財団と共存の森ネットワークが共催



話し手と聞き手の対話(岩手県大槌町吉里吉里地区)

「やっぱり居心地がいいんですね。何が違うんだろう、他人がいないっていうのかな」――。東日本大震災の被害に遭われた岩手県大槌町吉里吉里地区に住む女性の一言です。井上ひさしさんの小説「吉里吉里人」で有名な地域の普段の暮らしが目に浮かぶようです。

このような、震災前の日常生活の様子を101人に聞き、文章にまとめる取り組みが「被災地の聞き書き101」です(以下「聞き書き101」)。2011年7月、民間シンクタンク「東京財団」とNPO法人「共存の森ネットワーク」の共催で始まりました。聞き書きとは、聞き手が話し手にさまざまに質問し、その対話の録音をすべて文字に書き起こし、話し手の言葉だけで文章にまとめる手法です。

日常を取り戻すよりどころに

被災地での聞き書きは他にもありますが、私たちが主に聞いたのは一人ひとりが歩んできた人生、普段の暮らしです。それは、被災された方々が不安を抱きながらも、少しずつ日常を取り戻していく上でよりどころとなるのは、「被災地」と

いう抽象的な括りではない、自身が積み重ねてきた日々の営みではないかと思ったからです。道路や建物など、掛け替えなければいけないモノは多くありますが、それだけに、ひとつとして同じものはない、掛け替えのない話し手の暮らしの物語を言葉に残すことが大事ではないかと考えました。その考えに賛同してくださった101人に、社

富永朋義
公益財団法人
東京財団ディレクター

会人や大学生など47人の聞き手が避難所や仮設住宅で話を伺いました。1対1で約2時間の対話でした。なお、101人というのは、100という切りのいい数字ではない、次があるという意味を込めたものです。縁あって訪れたのは、岩手県の大槌町（吉里吉里地区）と陸前高田市（田東地区）、宮城県の南三陸町（志津川地区）と石巻市（田東地区）です。

どの地域の方々も聞き手一行を快く迎え入れてくださいり、仕事や家族のことなど、おそらくこれまで聞かれたことのない質問にも丁寧に答えていただきました。聞き手と話しながら、あるいは聞き手がまとめた自分の話を読みながら、普段あまり意識していないことに気付かれたこともあつた



「被災地の聞き書き101」ウェブサイト

ようです。聞き手も日ごろ見聞きしない話を聞いて、驚いたり、感動したり、自分に問いかけたりしていました。

話し手の確認を終えた作品は、特設ウェブサイト (<http://kikigaki101.tokyofofoundation.org/>)に掲載するとともに、冊子にして話し手の方々に渡します。生活の立て直しには長い時間を要しますが、聞き手との共同作業で紡ぎ出された暮らしの物語が、話し手の方々の今後の歩みに少しでもつながることを心から願っています。

日常を見つめ直すきっかけ

「聞き書き101」の物語は、私たちにとっても大きな財産です。社会的課題が山積する中、政治家がビジョンを語り、政策を世に問い合わせ決断していくことが必要な一方で、私たち一人ひとりは何を大切に思い、どのような社会に生きていきたいのか、という基本的なことについて改めて考える時期に来ていると感じています。

個々の価値観やイメージ、それに基づく日常の行いの積み重ねが、さまざまな制度と共に社会の形をつくる基底です。話し手の体験から紡ぎ出された言葉には、社会のあり方や社会への関わり方について私たちが具体的に考える際のヒントが潜んでいると思います。

例えば、祭りの話が多くありました。印象に残ったのは、「祭りがなくなるとまちがなくなる」という一言です。その地の風習や生活文化と深く

つながっている祭りは、地域の連帯意識を醸成するものです。そこでふと思つたのは、私が住む地域で、これがなくなつたらまちもなくなる、これがあるからこそわがまちであると言えるものは何か、ということです。皆さんの地域の「これ」、思い当たるものは何でしょうか。

もうひとつ例を挙げると、「季節のものはちゃんとそのときにやらないとね」という、旅館の女将の一言です。近年話題となつてゐる「野菜（植物）工場」は、塩害や放射能汚染の問題を抱える被災地の復興の手だてとしても注目が集まつてゐるようです。地域を問わず、土地の高度利用等のメリットはあると思いますが、一方でこれらも大切にしたいことは、その場所で、その時期にしか取れないものを食べる豊かさではないでしょうか。地の野菜、旬の野菜の料理や保存の仕

次の、日本。

次代の成長戦略へ。流れは、変わる。

民主党公指の政策通

元経済産業大臣

参議院議員

政治への思いを熱く語る。

直嶋正行

[著]

政治への思いを熱く語る。

東日本大震災からの復興。熾烈なグローバル競争を乗り越える、次代の成長戦略。

ここから、流れは変わる

● 四六判・244頁・定価 1,785円

時事通信社 時事通信出版局 <http://book.jiji.com/>

方は、その地の生活文化と密接につながつています。技術が可能にする暮らしの便利さと、暮らしを豊かにする生活文化をどう折り合わせていくのか、私たちの課題ではないかと思います。

まずは、目に留めた作品を読んでみてください。そして、同じ地域、同じ年代の話し手の作品へと読み進めていてください。共感を覚えるもの、自分の価値観とは違うものなどさまざまな出会いを通して、自分自身の生き方や社会への関わり方についてより深く考えることができると思います。

個の物語を地域の力に

地域の活性化に向けた試みが各地で進められていますが、聞き書きという営みはその基本ではないかと思います。とくに先行しがちな方法論の前に大事なことは、こうありたいと思う地域の姿を描くことです。それには、風土と共に営んできた暮らしその中で育まれた生活文化を見つめ直すことがとても大切です。

「そこに人がどのように住んできたか」ということがわかることによって、その地での住み方の向が見出されるものだと思う」「聞書き忘れぬ歳月」(東日本編)、八坂書房。これは、民俗学者の宮本常一さんが1970年代後半に書かれたことです。その地の生活史の中に、将来の姿を見いだすための問い(答えではなく)が潜んでいるということだと思いますが、今こそ、その視点が

求められているのではないか。

「聞き書き101」を読むことによる追体験とともに、皆さんが住む地域における暮らしの物語を聞き書きによつて紡いでいくという実体験が、その地域で大事にしたいことの再発見につながり、そして、これから暮らし方や地域社会のイメージの深化につながると思います。「地域」や「住民」といった抽象的な括りから考えるのではない、個人の人生や暮らしに光を当てる営み故の可能性です。

付言すれば、各地の聞き書きが積み重ねられていくと、日本社会の物語が徐々に姿を見せるのではないか。国家というシステムのあり方は、基本的に政治家や専門家が国際情勢等も踏まえて考えることですが、そのシステムと折り合っていく社会のあり方を考え、そしてその社会を担つていくのは私たち一人ひとりです。すべては、個が出発点です。

聞き書きの基本的な進め方については、前述のウェブサイト右上の「聞き書きとは」をご覧ください。聞き書きの名手でもあり、今回、聞き手の指導をしてくださった作家の塩野米松さんが、準備が始まる一連のプロセスを説明されています。大事なことは、テクニックではなく敬意を持つて相手の話を聞く姿勢のこと。聞き書きの本質を学ぶとともに、コミュニケーションの基本である「聞く」ということがしつかりできているか、日々の自分を振り返させられた一言でした。

この一冊に全国の自治体を網羅、一挙掲載!

全国知事・市町村長ファイル 2012-2013年版

編集・発行 一般社団法人 地方行政財調会
●1部2,100円(消費税・送料込み) ●B5判・133頁

地方自治の実務・研究、自治体ビジネスに携わる皆様の必携アイテム!

■ 全国の自治体トップの最新データ(2012年7月1日現在)を一挙収録。
■ 2005年7月以降の合併市町村一覧、索引も掲載。

お問い合わせ

株式会社時事通信社 業務局 事業部
TEL: 03-3524-6964 FAX: 03-3542-5554
<http://www.jiji.com/service/file/>

好評発売中!

時事通信社 〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8